

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

On the shiki yone of the Kyoto accent : centering
on the comparison with the Ibuki-jima accent

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中井, 幸比古 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/448

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



京都アクセントの式音調について

——伊吹島アクセントとの比較を中心に——

中 井 幸比古

要旨 京都市方言の2式の式音調について、中井編（2009b, 2010）所収の音声ファイルを資料として、無核型を対象に音響分析を行った。そして、中井（2009a）の伊吹アクセントの分析と比較して、以下のような事柄を説明・確認した。

(1)京都と伊吹の、低起上昇式無核（L0）の音調は、類似している。ともに語頭から語末近くまで一貫して上昇を続ける。より詳細には、語頭近くでやや急激に上昇し、その後やや上昇がゆるやかになり、語末近くのピーク直前で再度やや急上昇する（遅上がりと聞く根拠）。語末近くのピークの後は、語末までわずかに下降する。但し、語全体の上昇の大きさはかなり異なり、伊吹より京都の方がかなり小さい。これは、伊吹のH0型の語頭がやや低く始まる傾向があり、それとの弁別のためか。個人差・録音状態の相違も、この違いを強調した可能性もある。

(2)京都の高起平進式無核（H0）と、伊吹の高起非下降式無核（H0）の音調は、非常に異なる。ともに語頭近くにピークがあるが、京都ではその後下降していくのに対して、伊吹では下降がわずかでゼロに近い。伊吹の高起非下降式無核の音調には若干の世代差がある可能性があるが、どの世代の伊吹話者よりも京都のほうがはるかに下降が大きい。先行実験音声学的研究にも類似の指摘がある。伊吹の「高起非下降式」を京都と同じ「平進式」の名称で呼ぶことは不適當だと考える。

(3)京都の高起平進式無核(H0)と、伊吹の上の世代の高起下降式無核(F0)の音調は、類似している。

伊吹の高起下降式無核の音調には明らかな世代差がある。各世代とも語頭近くにピークがあってその後下降していくが、以下の相違がある。①上の世代ではピーク後の下降は同じペースでゆるやかであり、語末近くになって初めてやや大きく下降する。それに対して、下の世代ではピークの後やや急激に下降し、その後も拍が続く場合はやや下降がなだらかになる。全体として、下の世代は尖端がやや尖り、右側斜面がやや凹んだ曲線となる。②下の世代のほうがややピーク位置が語頭に近く、その結果、語頭の始まりは下の世代のほうが高い(特に2拍語)。③全世代で、語末終端近くの高さはそれほど変わらないが、そこに至るまでの下降のありかたが異なるため、下の世代のほうが下降の度合いが大きいと聞かれる。

京都の高起平進式無核(H0)の音調は、上記の、伊吹の上の世代の高起下降式無核(F0)と似ている。但し、伊吹の上の世代のほうが京都より語頭と語末の下降が大きい傾向にある(もっとも、語頭・語末部分は測定誤差が生じやすい)。伊吹の下の世代の音調は「下降式」と呼ぶにふさわしいが、伊吹の上の世代の音調は京都と類似の「平進式」の可能性があり、もしそうなら「平進式→下降式」の変化が起こったことになる。これは日本語アクセント史研究に一石を投じるものである。

はじめに

中央式諸方言のアクセントには高起平進式(H)と低起上昇式(L)の2式の対立が存在するが、その式音調に関する音響分析は意外に少ない。そこで、中井(2009b, 2010)などの京都方言の録音資料により、2~5拍体言の式音調を考察する。話者は1910年京都市中京区生まれの女性1名である。分析方法は、香川県伊吹方言の3式の式音調を扱った中井(2009a。以下前稿と呼ぶ)とほぼ同一である。中井(2009b, 2010)は本稿のような目的の

ただけに録音された資料ではないため、不十分な点も含むが、一つの報告として意味を持つと考える。

さらに、京都方言の結果と、前稿の伊吹方言の3式の音響分析の結果を比較する。両方言の比較によって、式音調の実質について考察を深める。

1. 考察範囲・分析方法

1.1 録音資料

録音資料は、中井（2009b, 2010）の中から以下の条件を満たす項目を選び、分析対象とした：①2～5拍体言、②H0型（高起平進式無核）またはL0型（低起上昇式無核）、③語中に無声子音と有声摩擦音を含まない（子音が含まれる場合は半母音・有声鼻音・有声破裂音・有声はじき音のいずれかのみ）、④語頭は母音・半母音・有声鼻音のいずれか、⑤録音状態・発話状態が極端に悪くない、⑥単独言い切りの発話。稿末に語彙リストを掲げる。拍数・音調型によって語数がばらつくのはやむをえない。

但し、2拍体言については、中井（2009b, 2010）ではなく、その後録音した、同一項目（但し例文を追加）・同じ話者による録音資料（近く公開予定）のほうが、状態が相対的によいと考えたので、そちらによることとした。

なお、上記③の子音の種類限定は、 f_0 測定の都合による。④の限定も語頭部分の基本周波数をできるだけ測定するためである。分析ソフトはPraatを用いた。なお、本稿では基本周波数 f_0 のエフを小文字 f とし、伊吹方言の高起下降式を大文字 F とする。

録音時、話者の年齢は満96～97歳であったが、きわめて矍鑠としていらっしやう。録音可能なもつとも上の世代の話者の録音として貴重であり、耳で聞いて音調型を確認するためには申し分ない資料である。しかしながら、音響分析のための資料として見た場合には、やや声のかすれがあり、声量・強さが若干不安定で、音調がどうしても多少はふらつく傾向もあった。その

ため、分析結果が、分析者の未熟に加えていくらか粗くなってしまうのはやむを得ない。

1.2 分析方法

分析方法は以下のものである。

①長さを正規化するため、当該の語について等間隔に、2拍32箇所、3拍48箇所、4拍64箇所、5拍80箇所のf0値を測定する。

②当該の拍数・音調型に所属する語彙全体の、上記①の各箇所のf0の平均値を取る。

③上記②のf0平均値の、初頭から末尾までの間の最高値を基準として、そこからどのくらい音が低いのかを示す。単位は半音値（セミトーン [st]）を用いた。音の絶対的高さを明示するために、f0の最高値も併せてあげる。

単独言い切りの場合、語頭と語末のどこまでを範囲とするかが難しいが、「f0を分析ソフトが正しく測定している範囲」「強さが急激に弱くなる前」を基準として決定した。厳密とは言えない面もあるが、或る程度の客観性は保たれていると考える。

有声子音およびその近傍は以下のような扱いとした。半母音・鼻音は特に問題が生じない限り、分析ソフトのf0の数値をそのまま採用した。有声破裂音・有声はじき音の場合はf0値が低めに出るので、その部分を削除して空白として、上記の平均値を取った。なお語中のガ行子音はほとんど鼻濁音なので、その場合は他の鼻音に準じて処置した。語中のバ行子音は摩擦音・接近音になる場合もあったが、それらの語例は含めることとし、摩擦音の場合は有声破裂音に準じ、接近音の場合は半母音に準じて処置した。

明らかな分析ソフトの測定ミスも削除して空白とし、上記平均値を計算した。

2. 京都アクセントの分析結果

2.1 京都方言高起平進式無核 (H0) 型

H0型の音調について拍数別にまとめたものを、図1から図4に掲げる。

f0のピークの時間的な位置は、2拍が $12/32$ 、3拍が $13/48$ 、4拍が $13/64$ 、5拍が $12/80$ である。拍数に応じて語全体の持続時間が伸びていると思われるから、語頭からの絶対的な時間的な位置はほぼ一定に保たれていることがわかる。

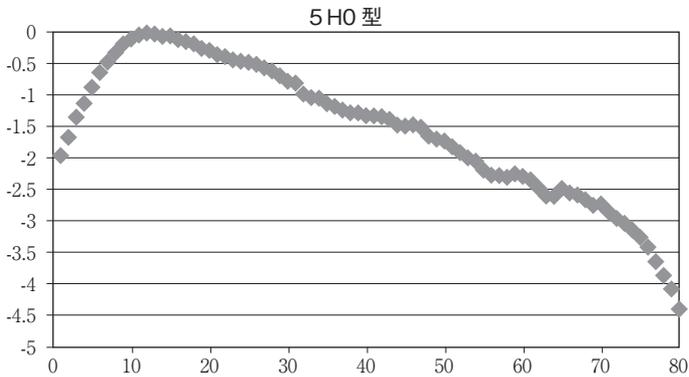


図1 京都5 H0型の音調

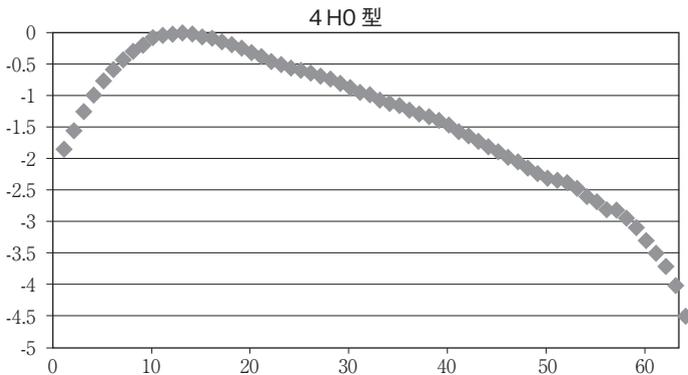


図2 京都4 H0型の音調

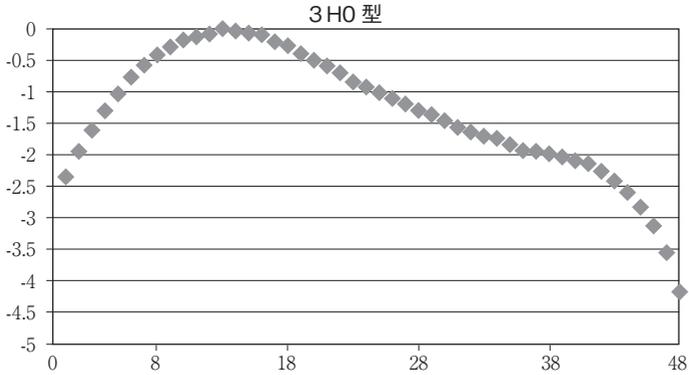


図3 京都 3 H0型の音調

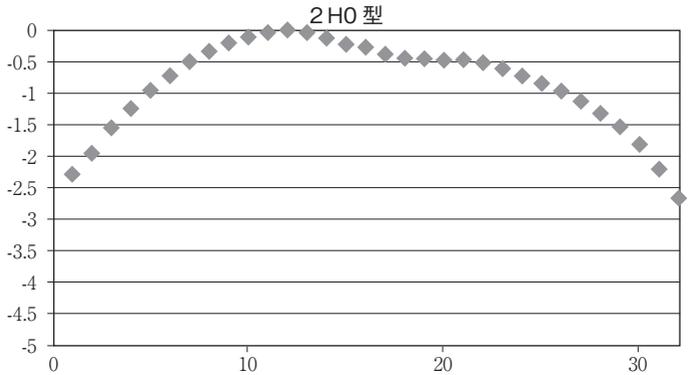


図4 京都 2 H0型の音調

語頭からピークまでの音調の上昇の大きさも、拍数に関わらずほぼ一定である。測定によるばらつきが生じやすいが、2拍で-2.3st, 3拍で-2.1st, 4拍で-1.8st, 5拍で-2.0stである。

一方、ピークから語末までの下降の大きさは、拍数が長くなるほど大きくなるのがわかる。これまた測定によるばらつきが生じやすいが、2拍で-2.7st, 3拍で-3.8st, 4拍で-4.5st, 5拍で-4.4stである。

ピークから語末までは一貫して下降していくが、語末近くまではやや下降が小さくほぼ同じペースで下降し、語末近くで下降が大きくなる。

ピークの f0値は、2拍237Hz, 3拍236Hz, 4拍241Hz, 5拍240Hzである。拍数に関わらずほぼ同じと見てよいであろう。拍数が多くなるにつれてわずかに高くなる傾向があるのかもしれないが、さらに多くの資料にあたる必要がある。

2.2 京都方言低起上昇式無核（L0）型

L0型の音調について拍数別にまとめたものを、図5から図8に掲げる。

f0のピークの時間的な位置は語末近くであり、2拍が25/32, 3拍が43/48,

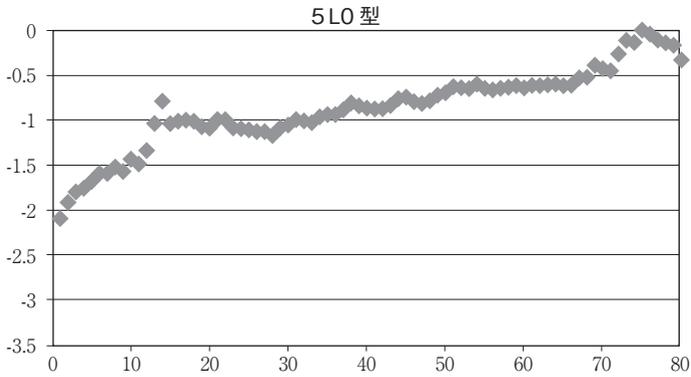


図5 京都5 L0型の音調

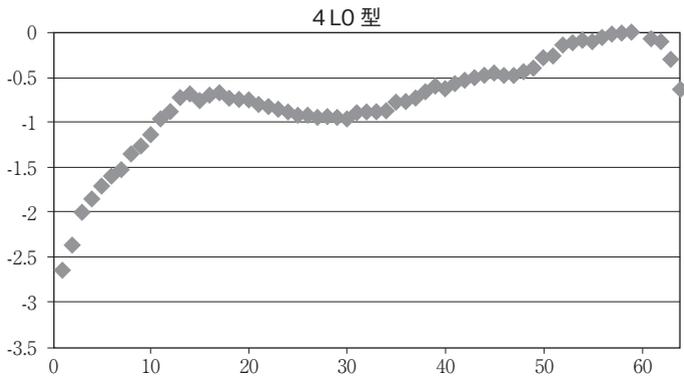


図6 京都4 L0型の音調

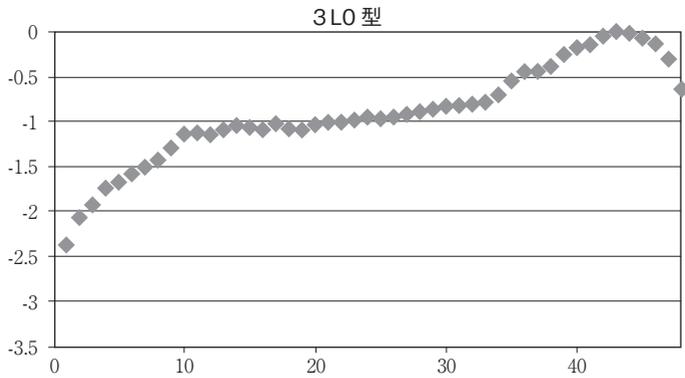


図7 京都3L0型の音調

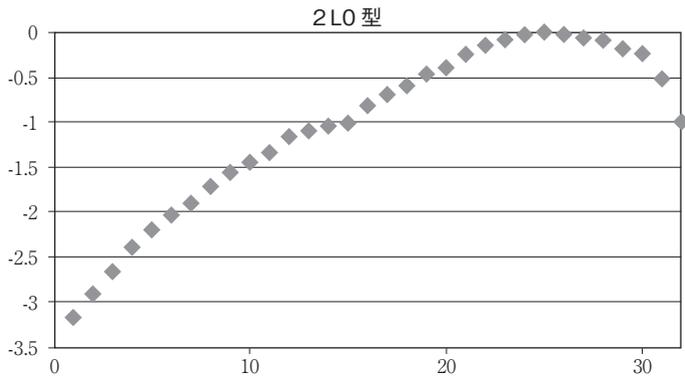


図8 京都2L0型の音調

4拍が $59/64$ ，5拍が $75/80$ である。語末からの絶対的な時間的な位置は、ほぼ一定に保たれていることがわかる。

語頭からピークまでの音調の上昇の大きさは、拍数によって、ややばらついている。今回の発話に関する限り、拍数と直接の関係がなさそうである。測定によるばらつきが生じやすいが、2拍で $-3.2st$ ，3拍で $-2.4st$ ，4拍で $-2.6st$ ，5拍で $-2.1st$ である。

ピークから語末までの下降の大きさは、2拍で $-1.0st$ ，3拍で $-0.6st$ ，4

拍で -0.6st, 5拍で -0.3st である。但し測定誤差も伴うであろう。聴覚的には語末にかけてとくに音調が下降しているようには聞こえないので、声の減衰に伴う自然な下降だろう。

語頭からピークまでの音調は、語頭からやや急激に上昇した後、平坦にやや近くなり、語末近くのピークの直前で再度やや大きく上昇するという形をとる。語末近くのピーク直前の上昇が、低起式を遅上がりと聞く、音響面の根拠となると考えられる。但し、語全体・語末拍近くの上昇の度合いは、後述の伊吹島に比べれば比較的小さい。

耳で聞くと、明瞭な遅上がりに加えて、特に5拍語で、全体が浮き上がったような音調や、徐々に上昇していき、明瞭な遅上がりとは言えない音調もいくらかある。音調のばらつきのどこまでが自然な音調の範囲かは難しい問題である（後述2.3節表1の音調の揺れも参照）。発話のスタイルなども含めて、今後より多くの話者の資料を分析する必要がある。

ピークの f_0 値は、2拍212Hz, 3拍216Hz, 4拍215Hz, 5拍216Hz である。拍数に関わらずほぼ同じと見てよいであろう。いずれも高起平進式のピークに比べて、約20-30Hz 程度低い。語頭から語末にかけて連続的に上昇し、かつそのピークが高起平進式のピークより低いということは、低起上昇式というにふさわしい音調である。

2.3 音調のばらつき

前節まで各音調型の平均値を見てきたが、各音調型に音調の揺れがどの程度あるのかを見ておこう。

表1は、語頭から語末までの各測定地点での f_0 値の標準偏差を算出し（単位 Hz）、その標準偏差の、最大値・第3四分点・中央値・第1四分点、最小値、全体の平均値を示したものである。

全般に、ばらつきの数値が前稿に比べてやや大きい。これは一つには、1.1節で述べた発話の状態が関係していると考えられる。

表1 音調のばらつき

	2 H0型	3 H0型	4 H0型	5 H0型	2 L0型	3 L0型	4 L0型	5 L0型
最大値	15.1	11.2	13.4	9.8	12.6	11.9	12.5	12.5
第3四分点	12.2	10.1	9.6	7.8	11.3	11.1	10.6	11.4
中央値	11.4	9.8	8.9	7.3	10.4	10.6	10.3	10.6
第1四分点	10.5	9.4	8.6	6.7	9.9	10.1	10.0	10.1
最小値	8.2	8.8	7.9	5.1	9.4	9.4	8.7	7.8
平均値	11.3	9.8	9.2	7.3	10.7	10.6	10.3	10.6

H0型は拍数が多くなるほどばらつきが小さくなっているのだが、これが果たして有意かどうかは不明である。

H0型とL0型を比較すると、2拍は例外だが、L0型のほうがH0型より数字が大きく、ばらつきが大きい傾向がある。これは、低起上昇式の音調が、自然下降に逆らって語末近くまで上昇し続けるという生理的に発話しづらいものであるためであろう。

3. 京都アクセントと伊吹アクセントとの比較

3.1 比較の方法

伊吹方言には、言うまでもなく、高起非下降式（H）、高起下降式（F）、低起上昇式（L）の3式の対立があり、前稿でその音調について検討した。ここでは、京都アクセントの高起平進式（H）と低起上昇式（L）の2式の音調と、音調の実質としてどのような一致・相違があるかを検討していく。

京都の高起平進式と伊吹の高起非下降式について、ともに同じHの記号を用いているので非常に紛らわしいのだが、とりあえずこのままにする。

京都の低起上昇式（L）は、伊吹の低起上昇式（L）に類似していることは明らかであるから、これを対照すればよい。一方、京都の高起平進式（H）は、伊吹の高起非下降式（H）、高起下降式（F）の両方と比較対照する必要がある。

前稿の伊吹の録音資料と本稿で扱う録音資料は、調査語彙や録音状態が異なるので厳密な意味での比較はできないわけだが、既存の資料に基づく考察では多かれ少なかれ直面する問題である。

3.2 京都と伊吹の低起上昇式無核（L0型）の比較

京都と伊吹の低起上昇式（L0型）の音調を比較する。図9と図10に前稿の伊吹方言のL0型の音調を再掲する。伊吹のL0型は前稿同様、遅上がりりのものに限る。

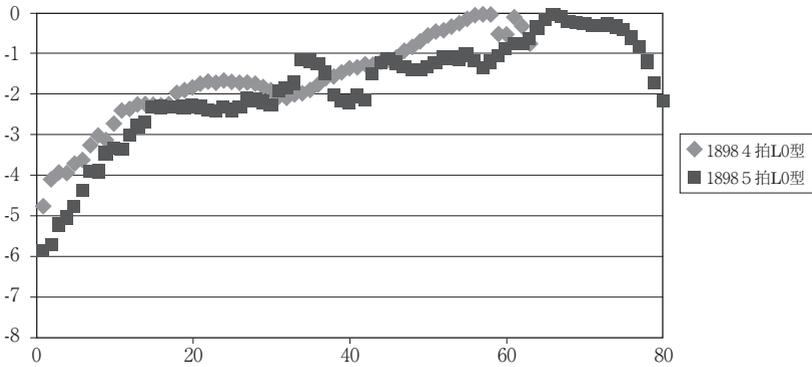


図9 伊吹4 L0・5 L0型の音調

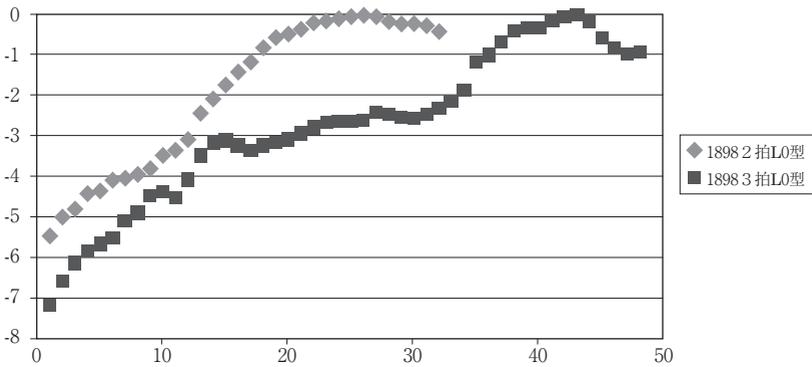


図10 伊吹2 L0・3 L0型の音調

図9～10を京都の図5～8と比較すると、両者の全体の形は非常によく似ている。ともに、語頭から語末近くまで一貫して上昇を続けている。より詳しく見ると、語頭近くでやや急激に上昇し、その後やや上昇がゆるやかになり、語末近くのピークの直前で、再度やや急に上昇している。語末近くのピークの後は、語末までわずかに下降する。

ただ、上昇の大きさはかなり異なり、京都の場合は2～3stと上昇の度合いが小さいが、伊吹では5～7stとかなり大きくなっている。これは、伊吹のH0型の語頭がやや低く始まる傾向があり（次節の図12・14・16・18も参照）、それとの弁別のために低く始まるのかもしれない。いずれにせよ、どちらの方言についても、より多くの資料を分析して、個人差・発話スタイル・録音状態などとの関係を明らかにする必要がある。

音調そのものの違いに加えて、録音状態が原因で、京都より、伊吹の方が始端と末端の端近くまでf0値を測定しているために結果の相違が際立った可能性もある。話者・録音状態によっては、京都についてももう少し上昇の度合いが大きい可能性がある。

3.3 京都の高起平進式無核（H0）と、伊吹の高起非下降式無核（H0）、高起下降式無核（F0）の比較

図11～図18に拍数別の、京都の高起平進式無核（H0）と、伊吹の高起非下降式無核（H0。京都と音調実質は非常に異なるが、これまでの記号を踏襲する）、伊吹の高起下降式無核（F0）の比較を掲げる。1898・1928・1951は伊吹の話者の生年である。残念ながら、伊吹は、拍数によって一部の話者のみの資料しかない。なお図11・12（5拍）の1951生の話者については、4拍体言+ガ付き言い切りの音調（合計5拍となる）を示したもの。それ以外はすべて単語単独言い切り。

まず京都の高起平進式無核（H0）と、伊吹の高起非下降式無核（H0）を比較しよう。図12・14・16・18からわかるように、両者の音調は、非常に異

なる。最大の相違点は、下降の度合いが伊吹のほうがはるかに小さいということである。伊吹については若干の世代差の可能性を指摘したが、下降がやや大きい可能性がある話者（1951生）も、京都に比べれば下降は非常に小さい。また伊吹の1898生の話者は語頭がやや低くから始まっている点も相違として上げられる。

やはり、京都をはじめとする中央式諸方言の高起平進式無核（H0）と、

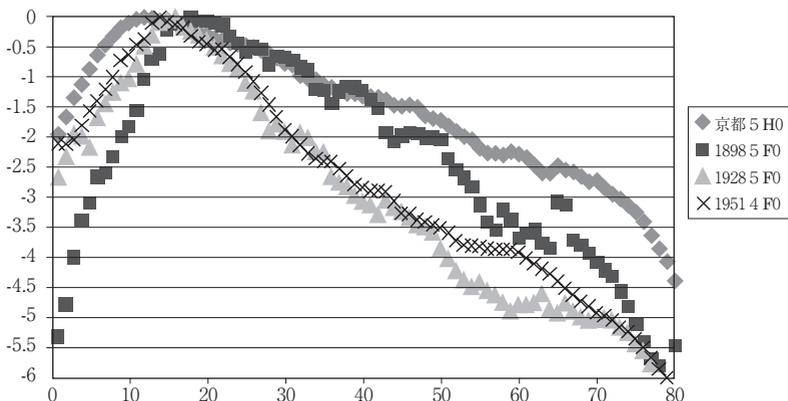


図11 京都5 H0型と伊吹5 F0型の比較

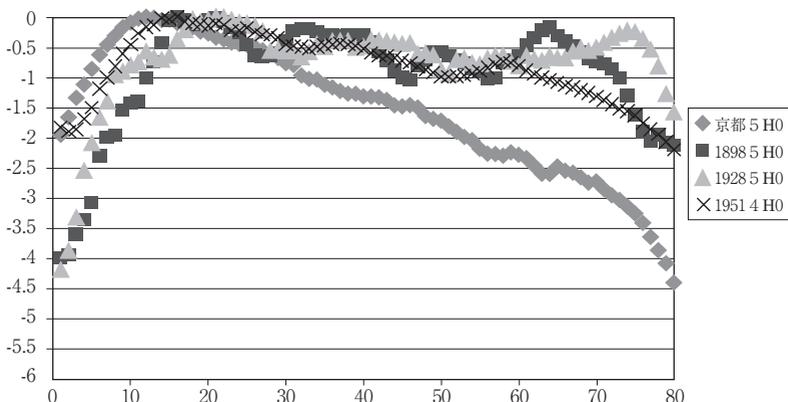


図12 京都5 H0型と伊吹5 H0型の比較

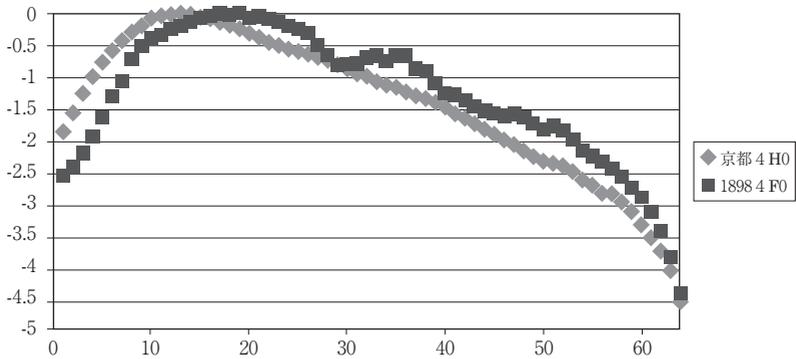


図13 京都 4 H0型と伊吹 4 F0型の比較

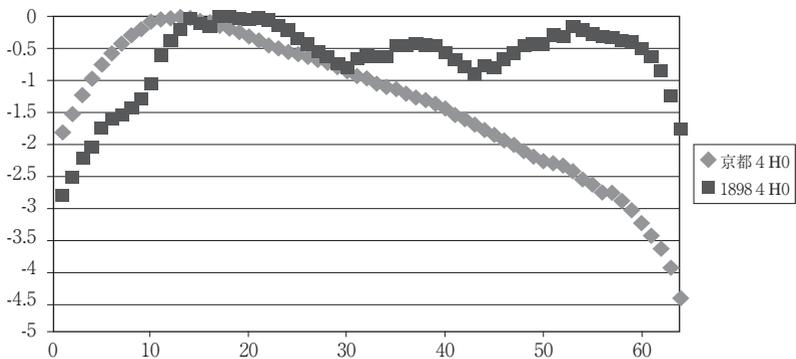


図14 京都 4 H0型と伊吹 4 H0型の比較

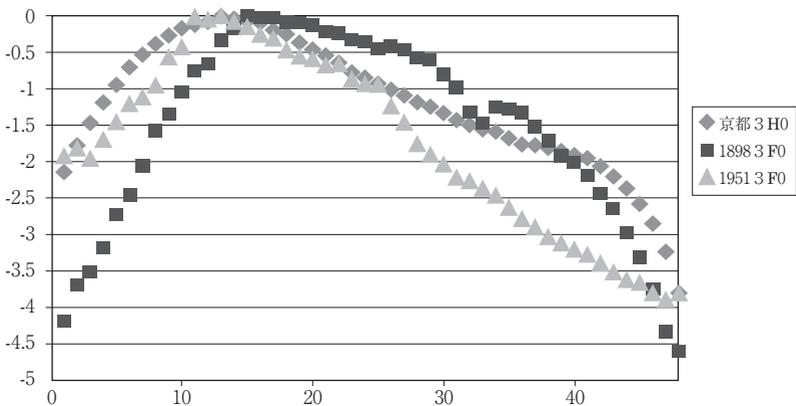


図15 京都 3 H0型と伊吹 3 F0型の比較

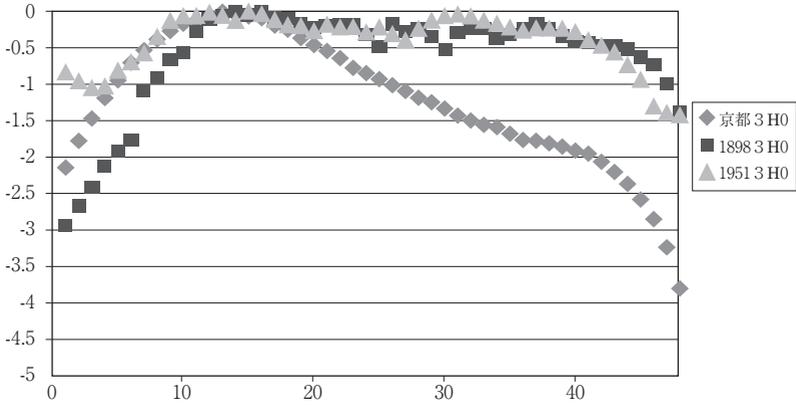


図16 京都3 H0型と伊吹3 H0型の比較

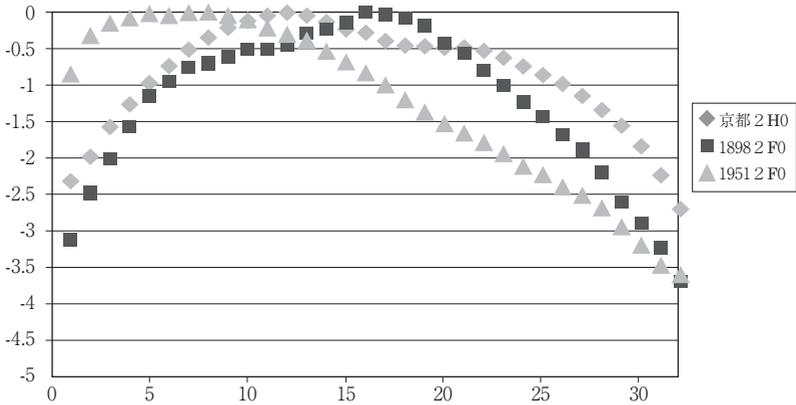


図17 京都2 H0型と伊吹2 F0型の比較

伊吹の高起非下降式無核（H0）を、音調実質として同じまたは類似の式と見なすことはできないと考える。これまでの中央式に関する報告——亀田（2006）の徳島県藍住町、吉田（2008）の大阪府岸和田方言——の高起平進式無核（H0）の音調も、京都に近い音調のように見えるから、これらも同様の扱いをしなくてはならない。

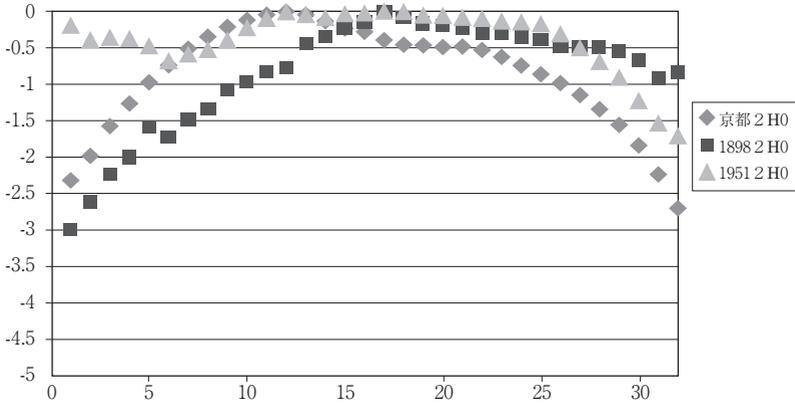


図18 京都2 H0型と伊吹2 H0型の比較

次に、京都の高起平進式無核（H0）と伊吹の高起下降式無核（F0）については、図11・13・15・17からわかるように、類似している。

前稿でも述べたように、伊吹の高起下降式無核の音調には明らかな世代差がある。①上の世代（1898生）ではピークに達した後の下降はほぼ同じペースでゆるやかであり、かつ語末近くになって初めてやや大きく下降する。それに対して下の世代（1928生・1951生。「上の世代・下の世代」は前稿で扱った話者の範囲でのもの）では、ピークの後やや急激に下降し（「高」から「中」への下降）、その後も拍が続く場合はやや下降がなだらかになる（図11の5拍語を参照）。全体の形として、下の世代は尖端がやや尖り、右側斜面がやや凹んだ曲線となるのに対して、上の世代ではそのような現象は見られない。②下の世代のほうがややピークの位置が語頭に近く、その結果、語頭の始まりの高さが下の世代のほうが高い。特に、2拍では相違が顕著である。①②の特徴を持つ下の世代の音調は、耳で聞いて「高中，高高中（中…）」のように記述できる。

なお、前稿の資料による限り、上の世代も下の世代も、語末終端近くの高さはそれほど変わらないのだが、そこに至るまで下降のありかたが異なるた

め、下の世代のほうが下降の度合いが大きいと聞かれる。

図から、京都の高起平進式無核（H0）の音調は、伊吹の下の世代（1928・1951生）より、上の世代（1898生）の高起下降式無核（F0）と似ていることが見てとれる。京都と伊吹の上の世代は、ともにピークの後の下降がなだらかである。伊吹の下の世代のように、ピークが尖り、かつピークの後でやや急激に下降して右側斜面がやや凹むというような現象が見られない。また、ピークの時間的位置も上の世代のものと類似している。

ただ、京都と伊吹の上の世代の音調が、本当に同一と断言してよいのかどうかはわからない。上記波形には出ていないが、佐藤（1985）の、伊吹の上の世代（中心）に関する「2拍ずつ組になってだらだと下がる」という観察もある。また、伊吹の上の世代のほうが、京都より、語頭と語末の下降が大きい傾向にある。もっとも語頭・語末については録音・測定で誤差が生じやすいので、さらに多くの資料分析が必要である。

3.4 式音調の名称について

式音調の名称について、いくらか提案を行う。

伊吹の「高起非下降式」（音調の下降はほほないか、あってもわずか）を、京都アクセントと同じ「高起平進式」と呼ぶことは避けるべきである。両者の音調実質は著しく異なるのだから、それぞれ別の名称を与えなければならぬ。その名称についてはいろいろの案が考えられようが、生理的に音調が徐々に下降するのが自然・無標だとすれば（但し自然な下降の実態については検討が必要）、京都のような音調を「高起平進式」と呼ぶのが適当であろう。下降がない伊吹の式については、本稿・前稿で用いた「高起非下降式」は一案である。略号についても、京都をHとするならば、伊吹のものは何か別のアルファベットを与えるべき（例えば下降なしのNとか）である。

伊吹の「高起下降式」については、下の世代の音調を「高起下降式」と呼ぶことは適切である。語中で高から中へ下降する（曲線の右斜面が凹む）か

らである。一方、上の世代の音調が中央式とあまり変わらないとすれば——但し上記のように本当にそうなのかについては慎重であるべきだが——、それはむしろ「高起平進式」とすべき可能性がある。もちろん、上の世代でも3式の対立は明瞭であるから、下がらないほうの式は「高起非下降式」などの別の名称を与えておかなければならない。

京都と伊吹の「低起上昇式」については、その名称は適切である。

3.5 伊吹アクセントの高起下降式の音調変化をめぐって

もしも、伊吹アクセントにおいて、「高起平進式（京都の高起平進式と同じ音調）」→「高起下降式」（第2拍と第3拍の間〔2拍語では第1拍と第2拍の間〕で高から中に下降し、かつ語全体としては自然下降を有する）の変化が本当に起きたとするならば、その変化の理由は考えなければならない。

下降の幅の増加は、高起非下降式の音調との区別の明瞭化が原因だと考えて問題ないだろう。（但し、〔より〕下の世代で高起非下降式のわずかな下降の量もいくらか増加したとすれば、区別の明瞭化の効果は薄れることになる）。問題は、なぜ、第2拍と第3拍の間〔2拍語では第1拍と第2拍の間〕という特定の位置の下降が大きくなったかである。上記佐藤（1985）の指摘に関連して、元来、自然？下降は2拍（フット）ごとにまとまりやすい傾向があり（但し実験音声学的裏付けが必要である）、もっとも目立ちやすい最初の下降が強められたと考えられるかもしれない。

そして、この変化が本当に起こったとするならば、日本語諸方言のアクセント変化において、「平進式無核→下降式無核（→有核）」というプロセスがありうることになり、下降式を祖体系あるいはそれに近いものとして立てる必然性が薄れるのではないだろうか。

4 おわりに

資料不足と分析の粗さは否めず、今回扱った方言・その周辺に分布する諸

方言について、一層の資料整理と分析が必要である。

諸方言の「下降式」について音調実質の一層の解明と各方言のアクセント体系内の位置づけの検討が必要であり、それらの結果を反映した日本語アクセントの祖体系に関する考察も必要となるだろう。

付記：本稿は、2010年度科学研究費補助金基盤研究(C)20520359「録音資料によるアクセント研究」の研究成果の一部である。

(2010年9月10日投稿)

京都方言の分析対象語彙

拍数(5, 4, 3, 2拍の順)・音調型別(H0, L0の順)にあげる。なお、[ei]は二重母音と長母音の両方の発音があったが、区別せず[eɪ]の形であげた。H0とL0の併用の語は、2カ所に現れることになる。

●5 H0型(14語)、あらいもの(洗物)、おもいやり(思遣)、おもむろに(徐)、おんなもの(女物)、にまいぐみ(二枚組)、まえいわい(前祝)、まえばらい(前払)、もよーがえ(模様替)、もらいもの(貰物)、ゆーびんや(郵便屋)、よごれもの(汚物)、よにんべや(四人部屋)、よねんぶり(四年ぶり)、わらいもの(笑物)。

●5 L0型(13語)、あんもにあ(アンモニア)、うろおぼえ(うろ覚)、えんぎもの(縁起物)、なりあがり(成上)、なんでもや(何でも屋)、なんばんめ(何番目)、にねんぶり(二年ぶり)、にまいぐみ(二枚組)、みどりいろ(緑色)、もらいもの(貰物)、やみあがり(病上)、わらいもの(笑物)、われながら(我乍)。

●4 H0型(90語)、あおまめ(青豆)、あげもの(揚物)、あみだな(網棚)、あめだま(飴玉)、あやおり(綾織)、あやまり(誤)、あらぬり(粗塗)、ありがね(有金)、あんがい(案外)、あんごー(暗号)、あんない(案内)、あんまり([副詞])、あんみん(安眠)、いいあい(言合)、いえがら(家柄)、いぬごや(犬小屋)、いまごろ(今頃)、いれもの(入物)、いわやま(岩山)、うでまえ(腕前)、うどんや(饅頭屋)、うぬぼれ(自惚)、うまごや(馬小屋)、うらざり(裏切)、うらない(占)、うらにわ(裏庭)、うりあげ(売上)、うりもの(売物)、うんどー(運動)、えいぎよー(営業)、えいよー(栄養)、えだまめ(枝豆)、えんがわ(縁側)、えんがん(沿岸)、えんげい(園芸)、えんでん(塩田)、えんばん(円盤)、えんまん(円満)、おーえん(応援)、おーだん(横断)、おーべい(欧米)、おーがね(大金)、おびあげ(帯揚)、おびどめ(帯留)、おもいで(思出)、おりもの(織物)、おるがん(オルガン)、おんどり(雄鳥)、おんなゆ(女湯)、ながねん(長年)、なないろ(七色)、なわばり(縄張)、にゆーいん(入院)、にゆーもん

(入門), ねあがり (値上), ねがえり (寝返), ねんだい (年代), ねんれい (年齢), のりもの (乗物), まえうり (前売), まえがみ (前髪), まるみえ (丸見), まんいん (満員), まんまる (まん丸), みおぼえ (見覚), みぎうで (右腕), みならい (見習), みまわり (見回), みんなー (民謡), むりやり (無理やり), めいもん (名門), めいれい (命令), めいろー (明朗), めんどり (雌鳥), もみがら (初殻), ももやま (桃山), やまいぬ (山犬), やまもり (山盛), やりがい (遣甲斐), ゆあがり (湯上), ゆいのー (結納), ゆーどー (誘導), ゆーびん (郵便), ゆーめい (有名), ゆみなり (弓なり), よーりょー (要領), よめいり (嫁入), よりあい (寄合), わりあい (割合), われもの (割物)。●4L0型 (40語), あいいろ (藍色), あおいろ (青色), いやいや (嫌々), いろいろ (色々), いんねん (因縁), おいわい (御祝), おーもり (大盛), おねがい (御願), おまいり (御参), おまもり (御守), おみあい (御見合), おみやげ (御土産), おんれい (御礼), おーよー (応用), なにいろ (何色), なにもの (何者), なんねん (何年), なんばん (何番), なんほん (何本), なんまい (何枚), にぐるま (荷車), にだime (二代目), にどでま (二度手間), にばんめ (二番目), にまいめ (二枚目), にんぎょー (人形), にんげん (人間), ぬるまゆ (ぬるま湯), ねんいり (念入), のびのび (伸伸), のらいぬ (野良犬), むぎわら (麦藁), もんだい (問題), ゆーぼー (有望), ゆーめい (有名), ゆーりょー (有料), よみうり (読売), よりどり (選取), わがまま (我儘), わるもの (悪者)。●3H0型 (64語), あいだ (間), あいま (合間), あえん (亜鉛), あがり (上), あぐら (胡座), あだな (渾名), あよ (あの世), あばら (肋), あまり ([副詞]), あるみ (アルミ), いえで (家出), いもの (鋳物), いやみ (嫌み), うがい (嗽), うでわ (腕輪), うどん (饅頭), うまや (馬屋), うらめ (裏目), うりば (売場), うわめ (上目), えいご (英語), えんりょ (遠慮), おぐら (小倉), おどり (踊), おもり (重), およぎ (泳), おわり (終), ないや (内野), なおり (直), くだれ (雪崩), ななめ (斜), なまえ (名前), なやみ (悩), ならい (習), ならび (並), ならみ (睨), ぬりえ (塗絵), ねあげ (値上), ねむり (眠), ねりま (練馬), のぼり (上), のぼり (幟), まもり (守), まよい (迷), まわり (回), みあい (見合), みぶり (身振), みまい (見舞), みやげ (土産), みりん (味醂), むりょー (無料), めいぼ (名簿), もどり (戻), もよー (模様), もらい (貰), やなぎ (楊), やんま ([生物]), ゆだん (油断), よだれ (涎), よぶん (余分), よわみ (弱), わだい (話題), わらい (笑), われめ (割目)。●3L0型 (33語), あやめ (菖蒲), あられ (霰), あんま (按摩), いおー (硫黄), いどー (異同), いどー (移動), いもん (慰問), いりょー (衣料), いろり (囲炉裏), うなぎ (鰻), えんぎ (演技), えんぎ (縁起), おまえ (御前), およめ (御嫁), ながや (長屋), なにが (何が), にげば (逃場), にだい (二代), にばん (二番), にまい (二枚), ねいろ (音色), のみや (飲屋), のれん (暖簾), まうえ (真上), まぐろ (鮪), まんが (漫画), みがる (身軽), みょーが (茗荷), やがい (野外), ゆにゅー (輸入), ゆぶね (湯船), よーご (養護), よもぎ

(蓬)。●2H0型 (75語), あげ (上), あげ (揚), あね (姉), あめ (鉛), あり (蟻), あれ (荒), いり (入), うえ (上), うみ (産), うめ (梅), うり (売), うれ (売), えだ (枝), えど (江戸), えな (胞), えび (海老), えら (鰓), えん (宴), おい (甥), おの (斧), おり (滓), おり (織), おれ (俺), おん (雄), なみ (並), なら (檜), なり (~をひそめる), なり (鳴), にえ (煮), にわ (庭), ぬの (布), ぬり (塗), のべ (延), のり (乗), まい (舞), まげ (髻), まめ (~に働く), まる (丸), まれ (稀), みぎ (右), みね (峰), みの (美濃 [地]), みぶ (壬生 [地]), みや (宮), むだ (無駄), むね (旨), むね (棟), むれ (群), めん (綿), めん (雌), めん (麵), もー (副詞), もえ (燃), もの (物. ~がよい), もみ (縦), もみ (舂), もみ (紅絹), もも (桃), もり (森), もり (盛), もり (鋤), もろ (~に), やぎ (山羊), やな (梁), やぶ (藪), やめ (止), ゆり (百合), ゆれ (揺), よい (宵), よめ (嫁), より (寄), わび (詫), わり (割. ~に合わない), われ (割), わん (碗)。●2L0型 (43語), あい (愛), あな (穴), あま (卑語), あま (尼), ある (或), あわ (粟), いね (稲), いま (今), いん (陰), うみ (海), うん (運), えん (縁), おー (王), おび (帯), おめ (お目), おゆ (お湯), おり (折), おん (恩), おん (音), なえ (苗), なお (猶), なに (何), にわ (二羽), ねん (年 [期]), ねん (念), のど (喉), のみ (鑿), まま (飯), まゆ (眉), まゆ (繭), みの (蓑), むい (無為), むぎ (麦), もり (守), もん (紋), やね (屋根), やゆ (擲擧), ゆば (湯葉), よー (癩), より (一層), わな (畏), わら (藁), われ (我)

参考文献

- 上野善道 (1985) 「香川県伊吹島方言のアクセント」『日本学士院紀要』40-2
 上野善道 (1989) 「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育2』
 上野善道 (1995) 「伊吹島方言アクセントの年齢別変化」『東京大学言語学論集』14
 上野善道 (2006) 「日本語アクセントの再建」『言語研究』130
 亀田裕見 (2006) 「四国北東部における下降音調の音声学的比較」『音声研究』10-1
 佐藤栄作 (1985) 「香川県伊吹島方言のアクセント体系を考える」『国語学』140
 中井幸比古 (1990) 「式の音調に関する二三の問題について」『香川大学教育学部研究報告』第1部79
 中井幸比古 (2003) 「アクセントの変遷」『朝倉日本語講座3 音声・音韻』朝倉書店
 中井幸比古 (2007) 「香川県広島方言のアクセント」『音声言語研究のパラダイム』和泉書院
 中井幸比古 (2009a) 「伊吹島アクセントの式音調について」『神戸外大論叢』60(6)
 中井幸比古編 (2009b, 2010) 『録音・京都アクセント辞典(1) 方言アクセント録音資料(2)』『同(2) 同(4)』(ともにDVD-ROM. wav ファイルと解説PDF ファイルを含む。科研報告)
 大和シゲミ (2009) 「近畿中央部若年層アクセントにおける式音調の変種」『大阪樟蔭

女子大学日本語研究センター報告』16

吉田健二（2008）「『式』の基本周波数上の特徴のパラメータ化」『論集Ⅳ』アクセント史資料研究会